

「娘シオンよ、喜び叫べ」

待降節第3主日C年

初代教会の時からキリスト者は、聖書をキリストにおける自己形成の助けとして「神的読書」(レクツィオ・ディビーナ)にしていました。ご存じのように、神的読書の大切なことの一つは、聖書の他の並行箇所と比較しながら読むことでした。たとえば、預言者がどのような使命のために選ばれたかを知らせる箇所は、マリアへのお告げ(ルカ1・25-38)の並行箇所として考えられます。そういう意味で、燃えていても燃え尽きない柴を眺めるモーセの場面(出エ3・1-3・22)は、マリアへのお告げの並行箇所とみなされています。並行箇所が便利なのは、み言葉について理解を深め、思いめぐらすのを助けてくれるからです。聖霊の助けによって、並行箇所と照合することで心が照らされるのを感じます。今日ご紹介したいのは、聖書とは異なる文学、たとえば日本文学の中に見られる聖書との並行箇所は、信仰のインカルチュレーション(文化内受容)についても教えてくれるということです。その一つの例として吉田兼好による「徒然草」の最後の段について考えてみたいと思います。

兼好が八つになった時、父に「仏様とはどういう者でしょうか」と質問して、「仏様は人間になったのだ」という答えを得ます。では、「人間はどうやって仏様になれるのですか」と尋ねると、「仏様の教えに導かれてなるのだ」という答えが返ってきました。さてこの対話の終わりはよく知られていますが、「人間に教えた仏様のことは一体何が教えたのでしょうか」と問うと、「その仏様もやはり、その前の仏様に導かれたのだ」という答えがありました。最後に「その教えを始めた第一番目の仏様は一体どんな仏様だったのですか」と問うと、父は「さあ、天から降ってきたのだろうか、地から湧いたのだろうか」と答えたとあります。私がここで指摘したいのは、兼好が記した父の最後の答えは、イザヤ書の、救いに飢え渴いていた人々に対する神の約束の並行箇所として考えられるということです。イザヤは次のように記しています。「天よ、露を滴らせよ。雲よ、正義を注げ。地が開いて、救いが実を結ぶように。恵みの御業が共に芽生えるように。わたしは主、それを創造する」と(イザ45・8)。

この、兼好と父との対話は読者に問題を提起させます。すべての仏様の悟りになった源は、結局どこから生じたのでしょうか? 他方、イザヤ預言者の言葉も、読者に問いを起こします。すべての人に救いをもたらす正義がどこから生じるのでしょうか? 彼らは暗示として、一つの詩的イメージを言い表し、歴史だけがそのイメージが意味する実在を明らかにします。「天から雨のように降り、地から植物のように芽生える」と。その言葉が示す実在がマリアへのお告げのうちに見いだされます。地はマリアの胎内を指します。雲は、荒れ野にさ迷うイスラエルの民に道を示す輝く雲を思い出させますが、聖霊にほかなりません。マリアの胎内に結んだ聖霊の実キリストは、歴史にわたってすべての人の心に結ばれた聖霊の実の泉となるのです。マリアの胎内の実と聖霊が結んだ実は同じキリストを指します。兼好もイザヤも、この解釈に驚かされるにちがいありません。

ですが最高の悟りの持ち主である、幼き神様イエスの体の内に輝いた星、ご自分の内なるビジョンについて一言お話する必要があります。すなわち、天の御父は人間となられた御子へのプレゼントとして、御子が直接御父を観るビジョンをお与えになりました。それを教えてくれたのはトマス・アクィナスです。そのビジョンのおかげで、成人したキリストは、ご自分のアイデンティティとご自分の使命が分かるようになりました。つまりご自分が唯一の神の御子であること、ご自分のビジョンの内容を人々に伝えることが御父からの使命であると理解なさったのです。一方、私たちはイエスからの啓示をいただいて、信仰を通して、神が私たちの父であり、御子キリストのいのちに与って御父の子に変えて

いただくのを知るようになります。それに、吉田兼好が、人間は悟りを含んだ教えに導かれて仏様になるのだと言っているように、実は、キリストの啓示を通して、神が自分たちの父であるのを知るようになる人間は、偉大な悟りを受けるだけではなく、一生涯にわたって果たすべき課題もいただきます。すなわち、御子の従順にならって、御父の子、そして、御子の兄弟として生かしていただけるのです。

今日の典礼は、大いに喜ぶように招いています。第一の朗読では、ゼファニヤの預言が読まれます。「娘シオンよ、喜び叫べ。イスラエルよ、歓呼の声をあげよ。娘エルサレムよ、心の底から喜び踊れ」と。こうした言葉は、おとめマリアへのお告げの天使ガブリエルの言葉にこだましています。「恵まれた方、大きく喜べ」と。ギリシア語の原文にある「ハイレ」喜べ、という言葉は、ヘブライ語の「シャローム」に通じます。シャロームの言葉に、メシアがもたらす豊かさがこめられています。数世紀にわたって、イスラエルの民は、メシアの待望を心に抱いていましたが、その期待はマリアの心にあふれるシャロームの豊かさに変えられました。今日の典礼は聖母のように喜ぶように招いてくれます。長い間、待ちに待った宝くじが、やっとのことで当たったということを楽しんではいられません。似たような幸せに私たちは出会っています。御子が間もなくマリアからお生まれになるところです。彼は私たちに福音を伝えてくださいます。つまり、神が父であるという信仰を受けることによって、私たちは御子のいのちに与り、父である神の子どもとなり、御子イエスの兄弟となります。信仰と共にそれを生きる力が無償で与えられます。人間は最高の宝くじに当たったのです。罪びとである私たちは、神の家族に受け入れていただいたのです。確かにそれをいただけるのは幼子だけです。ですが福音書がいう幼子とは、私たちのこと、聖霊によって新しく生まれた人のことです。

J. E. ペレス・バレラ S. J.